



教科書における図の研究
－「羅生門」の掲載図を考察する－

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2015-05-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大村, 勅夫 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00008759

教科書における図の研究

―「羅生門」の掲載図を考察する―

大村 勅夫

1 はじめに

国語教科書教材を学校教員が教材研究する際、その中心となるのは当然、その本文であることは間違いない。しかし、教科書教材には本文だけでなく、脚注、教材末設問などがあり、さらには、挿絵や写真、表やグラフなどといった掲載図がある。とはいえ、掲載図を本文と同じように考えてよいのだろうか。

近年の国語教育において注目せざるを得ないものに、OECDによるPISA調査があることは間違いない。このPISA調査において、読解力は次のように定義されている。「読解力とは、(中略)書かれたテキストを理解し、利用し、熟考し、これに取り組む能力である。」そして、この「書かれたテキスト」を次のように定義している。「書かれたテキスト」とは、言語が用いられた印刷物、手書き文章、電子表示された文章などで、図、画像、地図、表、グラフなどの視覚的表現は含まれる」である。つまり、教材における掲載図は、本文の読解に資するためのものである。読解に向けて、本文および図を理解し、利用し、熟考し、取り組むのである。したがって、掲載図もまた、教科書教材の重要なフアクターである。

この教材の一部である掲載図についての先行研究は散見される。小学校・中学校国語教科書における図については向後・向後(一九九五a、一九九五b)などがある。小学校国語教科書における挿

絵については有働(二〇一一)などが充実した研究である。しかし、高校教科書の文学的文章についてのものはくわずかで、かつ、それは掲載図については部分的なものであり、中心として研究しているものではない。しかし、先にあげたPISA調査はその対象を15歳としているものの、同じくOECDにより読解力等を調査しているPISA調査は16歳以上を対象としていることから、読解のために図を利用等することの指導や研究は、高校段階においてもなされなければならないものである。

本研究では、高校国語教科書での文学的文章における掲載図について調査し、考察する。中でも、高校教科書の定番教材「羅生門」(以下、「羅生門」とする。)における掲載図について分析し、考察する。「羅生門」は、必修教科目である「国語総合」現行教科書全てに採択されていることから比較・検討ができるためである。「羅生門」についての研究は、その本文内容や指導方法については膨大な数である。その中で、甲斐(一九七三)や山森(二〇〇六)、河内(二〇一一)は、「羅生門」の注記・脚注についての充実した研究をしている。しかし、「羅生門」における掲載図についてのものはきわめて少なく、管見の限りでは、幸田(二〇一三)が「羅生門」教材史研究の一部として、その挿絵数の推移を述べたものがある程度である。そこで、現行教科書における「羅生門」の掲載図を分析し、考察する。ここに本研究の意義がある。

2 分析

本研究は、現行教科書における「羅生門」の掲載図を分析し、考察を加えるものである。本研究においては、以下のものを掲載図とする。それは、図、挿絵、写真、地図である。分析の対象教科書は、高校教科書会社9社のうち、「国語総合」を現代文分野・古典分野の2分冊にしている、現代文分野のものとする。9社のうち、8社である。それは、一つに、各社において分冊は自社比較の最上位レベルとして扱っていることからレベルの均質化を図るためである。高校教科書は、各社から2〜4冊出されており、その対象も

	A社	B社	C社	D社	E社	F社	G社	H社	計
	いずれも全12頁で構成								
市女笠	1	①	1	1	1	2	1	1	8社
揉烏帽子	2	①	2	2	2	2	2	2	8社
羅城門復元模型	②	④	②	⑤	②	④	②	①	8社
鴟尾	2	2	2	2	2	2	2	2	8社
平安京(復元)図	③~④	② *2		③~④	③	②	③ *2	②	7社
葵土	4	4	4	3	3		4	4	7社
やもり	6	6	5	6	6		6	6	7社
檀皮色	7		6				7	6	5社
映画「羅生門」のセット	5	表紙裏							2社
火桶	5	5	4	4	4		5	4	7社
簀	8								1社
簀	10								1社
簀		4							1社
「羅生門」原稿		表紙裏		単元原	⑧				3社
初版本表紙			⑩	単元原			⑫		3社
標							2 *3		1社
山吹							5	5	2社
芥川の写真								④	1社
計	12	11	9	10	9	6	12	11	

- *1 数字はそれぞれ、本文の何頁目の掲載であるかを表す。
 なお、数字のものは、脚注にあるもの、丸囲み数字は、本文中にあるものである。
 *2 本文および脚注にまたがって掲載されている。
 *3 ただし、「揉烏帽子」の図にて併せて表している。

表1

異なった編集がなされている。このことは、「羅生門」が小説教材の何番目に配置されているかの相違からもわかる。よって、挿入図の種類・配置などが同じ会社でも対象レベルに応じて異なり、別の検討が必要となるためである。もう一つに、現代文分野に分冊特化されていることでその掲載図の対象が明確化を図ることである。これは、分冊でないものには、資料編のページなどに、古典分野の資料・掲載図と併せて掲載され、「羅生門」を念頭に掲載されてものであることについて曖昧になるためである。

分析結果を【表1】にまとめた。

採用されている掲載図は、18種類あり、中には、「初版本表紙」など、全く同じ写真が載せられているものもあった。1社につき、最少で6、最多で12の図を掲載していた。全社で載せているものに「市女笠」「揉烏帽子」「羅城門復元模型」「鴟尾」があった。1社のみものに「葵」「簀」「襖」「芥川龍之介の写真」があった。また、掲載図の大半が冒頭の場面、すなわち、下人が門の楼へ上るまでの場面の頁にあることがわかった。F社においては「檀皮色」以外がそうであった。また、掲載図のほとんどが脚注にあり、本文中に挿入されているものは半数に満たないものであった。

3 考察

まず、冒頭の場面に大半の掲載図があることであるが、掲載図を用いて、本文そのものではなく、語句知識をとらえさせ、本文の様相や背景の理解へと学習者を導いているためと考ええる。河内(二〇一二)は、「現代日本語書き言葉均衡コーパス」を用い、脚注語句の一般社会での流通実態をレベル別に調査している。その調査で下位レベルに位置する脚注語句に図が用いられている。すなわち、古語や流通実態の少ない語の脚注に図が用いられている。例えば、最

下位レベルとしている「市女笠」「甕」「火桶」「築土」に図が用いられているのである。確かに、これらは現在では目にすることも耳にすることも希なるものであるといえようから、そういった下位レベルのものの理解に向けて図が掲載されたと考ええることは難くない。学習者に、平安期のイメージを持たせよう、文章を読み進める意欲喚起の一助として、との意図が考えられる。

しかし、これらの掲載図は、「羅生門」読解に大きな意味を持つものであろうか。もちろん、テキストに存在する語句は全て読解に意味を持つ。とはいえ、例えば「甕」などを、図によってその形状を知り、そこからさらに背景を知ることが、読解への大きな意味を持つものだろうか。文学的文章読解に向けて、人物把握には価値があることは、小学校から指導されていることである。この「甕」を知ることが人物把握、つまり、「羅生門」における下人や老婆をとらえることにそれほど価値があるとは到底考えられない。ここで、改めて、先にあげた18種類の掲載図が、下人あるいは老婆に直接に関連するものか、それともおおよそ関連の無いものか、を分類する。【表2】

分類の結果、18種類のうち、下人の形容、思考・行動などに関連するものは6種類に過ぎないことがわかった。老婆についても6種類である。このことから、「羅生門」掲載図の多くが、その形状などを知らしめることだけのものであり、人物造形の把握に寄与していないことがわかる。もちろん、「市女笠」や「採烏帽子」といった平安期の庶民の

	芥川写	襖	山吹	初版本	原稿	甕	墓	鷲	火桶	映画セツ	楳皮色	やみり	築土	平安京	鷗尾	羅城門	採烏帽	市女笠
下人			○							○		○		○		○		
老婆		○																
その他				○	○	○	○		○				○		○		○	○

表2

服装の者がいない↓日常と異なる↓異質なことの予兆↓その中で下人、といったことも読解の一つであろうが、このこと、「市女笠」そのものの形状を図によって知ることとは関連は無い。「鷗尾」や「築土」などもそうである。もちろん、「初版本表紙」や「芥川の写真」もそうである。「羅生門」における掲載図は読解に資するものばかりで構成されているとは言い難いものである。

また、その反対に、人物把握のためにとらえておきたいが、その図が掲載されていないものもある。例えば「襖」である。稿者は、授業実践において、「羅生門」の各場面を図示させることを行うが、学習者による「襖」の図は、貫頭衣のようなものであったり、着流しのようなものであったり、と様々なものとなっており、その把握はできていない。この「襖」についての掲載図は1社にしかなく、人物図によって「採烏帽子」と併せたものとなっており、そのうえ、「襖」全体でもなく、正面図でもないという、その図のみからでは「襖」とはどんなものかを容易には把握しづらいものである。この下人の「襖」は、老婆の着衣が「着物」としか描写されていないことと対比的なものである。下人と老婆の困窮具合の浅深や身分的な違いなどが表現されているものととらえることもできる。いずれにせよ、「襖」という明確なものとは「着物」という漠然としたものという差違はあり、対比的人物造形と大きく関わるものである。その他にも、「聖柄の太刀」の図もない。「聖柄の太刀」は、単なる太刀ではなく、太刀ではあるが「聖柄」でしかないことに下人の人物造形と関連がある。その「聖柄」の注釈はテキストによるものだけであるが、太刀そのものすらも生活に密着していない現代に、その太刀の一部分だけでしかない柄の理解をテキストのみで求めることは困難である。

これらのことから、現行教科書における「羅生門」掲載図は、「羅生門」読解に向けて必ずしも適切とは言えず、不十分なものであると考えられる。

4 授業デザイン

ここでは、現在の「羅生門」で使用されている掲載図を積極的に活用した授業をデザインする。指導事項は読むことである。そして、読む力向上のための言語活動に掲載図を用いる。つまり、掲載図そのものの読み取りや学びによって「羅生門」読解がなされるのではなく、掲載図を機として読解を図るものである。

(1) 授業の目標

・読む力の向上

(2) 言語活動のポイント

- ・「羅生門復元図」および「平安京図」から、下人の体勢を推論する。

・推論した内容をグループで討議し、発表する。

(3) 発問内容

①冒頭において、下人はどちらを向いて座っていたのか。

京を望むように座っていたのか。あるいは、京を背中に背負っていたのか。

②末尾において、下人はどちらに向かっていったのか。

京の内に向かってたのか。あるいは、京の外に向かってたのか。

①については、「羅生門」冒頭において、下人は石段の一番上の段に座つていることが描写されている。そして、雨やみを待つて雨を眺めている。しかし、その向きについては述べられていない。復元図によって、門は立体化され、下人のいる位置は、石段と叫いいかにも座りやすいところであり、かつ、その最上部という先を見通してしまえるところにいることがわかる。最上部という先を見通してしまえるところということから、下人が自身の先を見通してしまえることがとらえられたり、そこに立っているのではなく座つていることから、その見通しに失意や無力感が表れていることなどを学習者に想起させる

こともできるだろう。そして、例えば、下人が京の内から門に来て、京の内を望んでいたのなら、京への振り払いきれない憧憬や懐古が、下人が京の外から来て京を背中に座つていたなら、京への希望から失望との変化などを考えさせることができるだろう。下人がどこから来たのか、どこへ行くかとしているのか、そして、どこへ行くべきかの迷いの暗示であることをも学習者に考えさせることができる。すなわち、その場所の把握によって、人物の背景や現状などがとらえられることを学ばせる手段として掲載図を活用するのである。

②については、まず、羅城門の位置が平安京の内外の境にあることを学習者に確認させる。その上で、「羅生門」末尾を確認させる。その末尾は、「下人の行方は誰も知らない。」のであるから、このテキスト部分だけからでは、下人の進む先は判然とはしない。ただし、初出からの改稿があったことは広く知られたところである。初出の末尾では「下人は既に、雨を冒して、京都の町へ強盗を働きに急ぎつゝあつた。」とあることから、芥川は下人の進んだ方向を確定していた。このことを知る者が「下人は京の内に向かって」と回答することは想像に難くない。しかし、高校生という「羅生門」初学者にとっては必ずしも改稿の事実を知っているとは限らず、単純にその回答へととはならないだろう。あるいは、初出の末尾を提示してもよい。その際でも、「改稿されているという事実」を重く見させるならば、事態は変化するはずである。「京の外に」下人が進むことについても一方の余地が出てくるだろう。つまり、門の位置とそこからの進んだ方向が、すなわち、下人の行為が、下人の心情とつながっていること、行為と心情とは関連することをやはりここでも学習者に学ばせるのである。学習者は下人の最終的な心情はどういったものなのかを考察させる手段として掲載図を活用する。

繰り返しになるが、これらは、「羅生門」掲載図を積極的に活用したデザインである。図を言語活動の補助として積極的に用いるこ

とで、学習者に場所と行為を想起しやすくさせ、考察の一助とさせたのである。「平安京図」そのものから「羅生門」読解が進んだというわけでは決していないが、読解に向けた一つの手段として提示したい。

5 課題

本研究では、現行教科書「羅生門」の掲載図について分析および考察を加え、読解に向けて不十分なものであるとしたが、課題はまだある。まず、現行教科書全てを調査することである。本研究では比較・検討のため、同レベル・同状況にあるものを選んだが、より広範に見る必要がある。次に、過去の教科書を調査し、通時的にその変化等を分析することである。掲載図の数や種類がどのような変化を見せているかによって、とらえられることがあるだろう。また、掲載図そのものについては、他教材のみならず、小学校・中学校教科書教材との比較である。例えば、古典分野においては校種共通教材がある。その掲載図の異同について考察することも必要だろう。これらについて、今後の課題とし、引き続き研究をすすめていく。

【主な参考・引用文献】

- 平野和子(一九九六)「小学校国語教科書の挿絵の研究」『横浜国大
大國語教育研究』4 横浜国立大学国語教育研究会
甲斐睦朗(一九七三)「教材研究『羅生門』——教科書の注記を中心として——」広島大学教育学部光葉会『国語教育研
究』20
河内昭浩(二〇一一)「教材「羅生門」の語彙研究」『安田女子大学
紀要』40 安田女子大学
向後千春・向後智子(一九九五a)「日本の小学校・中学校の教科書

における説明図の調査」『富山大学教育実践研究指導
センター紀要』13 富山大学教育学部附属教育実践
研究指導センター

向後千春・向後智子(一九九五b)「日本の小学校・中学校の教科書
における説明図を検討する」『富山大学教育実践研究
指導センター紀要』13 富山大学教育学部附属教育
実践研究指導センター

幸田国広(二〇一三)「定番教材の誕生——「羅生門」教材史研
究の空隙——」全国国語教育学会『国語科教育』74

三森ゆりか(二〇〇二)「絵本で育てる情報分析力」『声社
有働玲子(二〇一一)「教材「スイミー」指導の一考察——挿絵の意
義について——」『解釈』666 解釈学会

山森泉(二〇〇六)「教科書所収の「羅生門」における脚注の比較
——学生の語彙理解に関する一考察——」『北陸学院短期
大学紀要』38 北陸学院短期大学

* 今回もまた、北海道教育大学釧路校佐野比呂己教授にこ
のような機会をいただいた。PISAに言われるまでもなく、教
科書は文字テキストだけで出来てはいない。そして、文字テキスト
だけで構成されているもののほうが、我々の生活には少ないのが
実際である。それはもしかすると、国語教育を担う者の一端と
しては悲しむべきことなのかもしれない。けれど、学習者に国語
の力をつけるのと同時に、生きていく力を身につけることが我々
には必要なのではないかと教育そのものについても思いを巡ら
せている。そんなことを考える機会をいただけた。心から謝意を
示したい。

(おおむらときお／北海道旭川東高等学校)